

消防トピックス

被災地の消防団は今

福島県南相馬市消防団

1 はじめに

南相馬市は、太平洋に面する福島県の浜通り北部に位置し、平成 18 年 1 月 1 日、旧原町市と旧小高町、旧鹿島町の 1 市 2 町が合併し人口 7 万 1 千規模で誕生しました。

山・海・川の幸に恵まれた、報徳仕法によって復興した歴史ある温情の厚い地域です。



(注) 上記の南相馬市の拡大図は、北から鹿島区（旧鹿島町）、原町区（旧原町市）小高区（旧小高町）

毎年 7 月には、甲冑をまとい、旗を背負ったまま、甲冑競馬、神旗争奪戦等を行う相馬野馬追を開催する地として御存知のかたも多いと思います。毎年、野馬追に出場する団員も多くいます。次の写真は甲冑競馬の様子です。

迫力ある勇壮なシーンを撮影しようとプロアマを問わず、写真家にもすごい人気です。



2 南相馬市消防団の紹介

消防団も、新市のスタートと同時に、団長以下 1,365 名（うち女性消防団員 16 名）による 1 市 2 町を統合した 3 区団体制の組織が誕生しました。



平成 25 年度春の検閲式（同年 4 月実施）

消防団には、総勢 38 名のラッパ隊が付置してあります。

消防団検閲式等の式典には、必ずラッパ隊が出動します。

太鼓のリズムとラッパの吹鳴に合わせて行進する団員総勢の勇姿と、ラッパ隊が奏でるファンファーレには、来賓者等一同が感銘を受けています。



ラッパ隊先頭による団員の行進



ラッパ隊のファンファーレです
え、聞こえない？ 残念！

3 東日本大震災

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が起きました。南相馬市も甚大な被害を受けました。「消防団の今」を語るにも、当時の大震災から申し上げないと任務を果たそうとして命を落とした団員に申し訳がありません。

多数の著書でも、悲しすぎる現実や各地の消防団の活躍が紹介されていますが、わが市の消防団

員も命をかけて活動しました。

巨大地震を感じると直ちに、団長以下団員が自主参集し、沿岸部において避難広報や避難援護活動を実施しましたが、このとき津波に巻き込まれ 9 名が殉職し、後遺症が残る重傷者 1 名、軽傷者 4 名を出してしまいました。



高さ 10 メートル以上の津波が人家等すべてを消失させました。

4 団員の活躍

それでも、団員は、避難先で取り残された者の救助活動を実施しました。

当日の夜間になり、電気も通らず一点の明かりもない漆黒の闇の中、津波で一面が大きな溜め池になった場所に、救命ボートを出し生存者を救助しました。

その後も毎日、50～60名の団員が自主参集し行方不明者を捜索しました。

津波に流された広大な捜索場所は、一面が、がれきや土砂等で埋め尽くされ、ぬかるんでいるため重機も入れず、団員は、足をとられながら歩いて手作業で捜索を続けました。

震度4、5クラスの余震が長期間続きました。

海岸線の捜索活動は、余震が起きるたび、再び襲ってくるかもしれない津波の恐怖にさらされ、さらに東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故の放射能の恐怖にも耐えながら、多数の御遺体を発見し警察に引き渡しました。下の写真は、海岸の消波ブロック隙間の捜索活動中のものです。放射性物質から身を守るため防護服を着用して捜索活動をしました。



5 現在、抱えている課題

震災後の原子力発電所の事故の影響で、南相馬市の原町区の一部地区と小高区全域は、今もなお

居住できません。

多くの団員が避難生活の継続を余儀なくされ、遠方に避難して活動ができない団員も多数おります。

また、震災による精神的疲労等から消防団活動ができなくなった者もおり、徐々に退団する者が増える中、新規入団者が減少し、平成25年4月1日現在では、122名が退団し団長以下1,243名の体制になりました。

大津波により、沿岸部に配置してあった17台の消防団車両と20棟の消防詰所も流され消失しました。

消防団詰所の再建にも課題があります。

家屋等流された津波の被災地区は、居住できない災害危険区域として指定され家屋等は建っていません。

住民不在の元の被災場所に再建しても意味がなく、消防団車両の新規購入を含め再建場所の選定に苦慮しています。

南相馬市全体の復興も、まだ頂上が見えない長い坂道を歩いています。

南相馬市消防団は、新たな団員を募り再編を進めると同時に、将来意味のない再建・再編にならないように、市の復興と一緒に一歩ずつ歩んでいます。



津波で流された消防団車両

6 今後の防災方針

災害は、呼びかけを待ってから避難するというのでは遅いのです。

災害が発生した直後は、誰も助けに行けないので、市民一人一人が、自主的に避難する体制を構築していく必要があります。

これまでの津波に対する認識の甘さが、被害拡

大につながったことを教訓として、人命を最優先し被害を最小で止める「減災」の考え方により活動を行う方針です。

そして東日本大震災のすべてを後世に伝えるのが、目の前で地獄を見た私たち消防団の役目であると考えています。



負けねーど南相馬！

私たちは、3.11を忘れません。
多くの支援と物資等をいただいた、皆様の御厚意も忘れません。
ありがとうございました。